

進路を考えるために

現在、高等部の生徒が7名在籍しています。その内4名が、この3月に卒業を控えた3年生です。

足羽学園では養護学校を卒業してからの進路を、本人・家族・学校・関係機関と相談し、それぞれの希望に沿った進路を見つけてられるように支援しています。

その一つとして、40日以上にも及ぶ夏休みを有意



義に過ごすために高等部の6名が、足羽福祉会の他施設で実習を行いました。

1人は足羽ワークセンターで実習を行い、5名の方は足羽更生園の日常活動の場である「羽生の郷」で実習を行いました。

見えていなかった姿

「羽生の郷」で実習をしたHさんの話です。

Hさんのふだんの行動や、集中力から考えると、実習参加は難しいかもしれないと予想していました。しかし「羽生の郷」でHさんの様子を見ていた足羽更生園（足羽学園と足羽更生園は同じ建物内に併設され、利用者の方のふだんの状況を知っている環境）の職員からの言葉は、

「Hさんがすごく頑張っていたよ。」

「Hさんてあんなに集中力があるんですね。」
「というお褒めの言葉ばかりでした。」

普段からHさんの状況をよく知る、足羽更生園

の職員だからこそ感じる
ことができた驚きと感心
だと思えます。またタイムリーに状況を聞いた足羽学園の職員も、Hさんを大いに褒めることができました。

それによりHさんは、さらに頑張り、その姿に刺激を受けた他の利用者の方も「私もHさんのように褒められたい。」と真剣に取り組みました。

施設実習の意義

卒業後は地元に戻ることを希望されている方、引き続き足羽福祉会を利用される方、と進路はさまざまですが、足羽学園を巣立ったときに、成人施設で実習経験をしておくことによって、戸惑いや混乱を軽減することができます。

そして成人の利用者の方々が一生懸命に働く姿を見ることによって、自分たちの将来の姿を想像することができるようになります。

また、他施設に移られることになっても、本人の作業中の様子や得意分野などの情報を提供することが出来ます。

同じ法人内実習の強み

同じ法人内施設で実習をすることは、その利用者の方の情報を共有する



時間が過ぎることを忘れるほど作業に集中するHさん

ことで、実習中の改善点等も職員間ですぐに話し合い、さまざまなケースに対応（不安定な状態の対応・個性を理解した柔軟な対応）ができます。



足羽更生園 日中活動担当職員より

だれしも、新しい環境には不安や緊張、抵抗というものが付きまといます。特に障害がある方にとってはその影響は、はかり知れません。

しかし実習を経験す

ることで、同じ法人内で施設を移るときには、これまで使っていた道具、場所、顔見知りの職員の存在が、環境の変化を最小限に抑えてくれます。

高等部の方は足羽学園にいるときには、お兄さんお姉さんとしての存在ですが、成人の施設では立場が逆転し年下の存在となります。

大人の方と一緒に仕事をすることは、養護学校での作業（授業）とは違い、大人の世界を知り「仕事」としてとらえることができ、良い影響を与えているようです。実際に職員が驚くほどの変化が見られた利用者の方もいらっしゃいます。

足羽更生園

渡辺 浩基

足羽福祉会だから

できること…

それは利用者の方の生涯をサポートできる施設を持ち、全ての施設間で連携がとれること。

それは利用者の方に安心・満足していただくために選べるサービスがあること。

それは利用者の方の家族に安心して頼っていただけること。

これからも利用者の皆様、ご家族の皆様に「足羽福祉会でよかった」と思っていただけることが総合福祉施設の役割です。



仕事を終えて、満面の笑み

みんなの広場

ちょっと笑える私の宗族編

「おばあさんの補聴器」

今年で84歳になる私のおばあは昨年、補聴器を新しくしました。

その理由が：

ある日、テレビを見ながら「おかき」を食べていたおばあが、大笑いしながら私を呼ぶのです。面白い番組でもやっているのかとおばあのところに行くと、

おばあの手のひらには粉々に砕かれた「おかき」によく似たプラスチックの破片が：

そうです、おばあは自分の補聴器を「おかき」と勘違いし噛み砕いてしまったのです。

おばあは「おかあちゃん（私の母親）に怒られる」と言いながらも、笑いすぎて動けませんでした。

すぐに補聴器のお店に行き、代わりのもので購入しました。

お店の人に「おばあちゃん、どうしてこんなに粉々になっちゃったの？」と聞かれていましたが、おばあは思い出して大笑いするばかり。理由を答えることができませんでした。

今は、おかきを食べるときに一粒ひとつぶ、おかきか補聴器か確かめながら口に運んでいます。

足羽学園職員

Aさん

